片仮名本『因果物語』再考

――「跋文」の紹介――

土屋順子

はじめに

片仮名本『因果物語』は鈴木正三の作である。鈴木正三は、『因果物語』他、仮名草子の著作のみならず、近世仏教史に大きな足跡を残した宗教者でもあった。庶民教化の手だてとして、『万民徳用』（慶安三年刊）、『二人比丘尼』（明暦末～万治初頃）、『念仏草紙』（寛文頃刊）、『因果物語』（片仮名本、寛文元年刊）等の出版は、近世初頭の文学、及び仏教史を語る上で、重要な手がかりとなるであろう。しかし『因果物語』に関して言えば、実際に刊行に関わったのは正三の弟子「雲歩」（序に「雲歩和南題」・内題下に「義雲雲歩同撰」とある）らであり、正三自身は出版に関わっておらず、その経過もいまだ明らかでないことが多い。

本稿で問題とする『因果物語』は、諸国の因果応報譚を集めた短編集である。周知の如く、本書には、それぞれ内容を異にする片仮名本（三巻三冊）と平仮名本（六巻六冊）の二種がある。その出版を巡り、未だ多くの問題は不明のままである。正三の片仮名本（寛文元年十二月刊）[1]に先行する形で、平仮名本（刊記はないが、寛文の初め、あるいは万治元、二年頃）[2]が上梓されるのだが、その出版について、後発となってしまった片仮名本には激烈な平仮名本への批判・抗議が記されている。

然頃犯者アリ。竊ニ書写テ乱ニ板行ス。剰エ私ニ序分ヲ作、恣ニ他ノ物語ヲ雑入シテ、人ヲ瞞ス

ル事不レ少。斯ニ於テ弟子等止コトヲ不レ得、師ノ正本ヲ以テ梓ニ鏤、邪本ノ惑ヲ破ント欲ス（「片仮名本」序文）

平仮名本の作者を「犯者」と呼び、平仮名本を「邪本」と道断し、「邪本ノ惑ヲ破ント欲ス」るというのである。「邪本」とまで平仮名本を誹謗し、本書こそが鈴木正三の『因果物語』なのだと正当性を主張する。しかも

殊ニ此物語ハ、元亨釈書・砂石集ニ乗所ヨリモ証拠正シテ、初心ノ人ノ為ニ大幸アリト云ドモ、只今現在スル人ノ仮名有レ之以故、門人堅秘シテ世ニ不レ出也

という、「門人堅秘シテ世ニ不レ出也」と標榜する、一門以外、他者へ漏洩せざる書であった。にもかかわらず刊行された平仮名本は、片仮名本側にとっては、どれほど不本意なことであったろうか、想像に難くない。

一方、「邪本」と称された平仮名本の序文には、次のように記される。

云維因果物語は正三道人の集められし所、七部書の一なり。師は三州の人、姓は穂債。氏は鈴木、年少して当家の幕下に属し、忠功ほまれありといへども、人生を孚遊して仏心に悟入す。ながく名利の病をのがれてとこしなへに実際の玉をみがく、大愚愚道雲居等の明師みな這風漢に依て、万庵本秀おなしくその軌則にしたがへり。師の住居するところ室内さらに一冊の書なし。只金剛経一巻、過去帳一折のみ也。しかりといへども経文語録の玄奥を詰問するに、決択する事、言下にあり。をよそ化導の男女数しらず。つゐに、明暦元年乙未六月廿五日申の尅奄然として遷化せらる。行年七十七歳、臘三十六年也。度生の大願に依て七部の書をつゞる。其中に、此書は証拠たゞしきものをあつめて末世の衆生をすゝめんがためにかきとゞめられし所也。此故に梓工に銘じて、世におこなふ者也と云尓

あたかも、平仮名本の作者が鈴木正三の正当な門人であること、そして、平仮名本が「証拠たゞしきものをあつめて」という背景に出版されたことが、まことしやかに記されている。確かに『因果物語』は正三の著作、世に言われる七部の書の一つであり、序文に綴られる正三の来歴、平仮名本出版の由来をみると、作者と正三がかなり近しい関係であったことを想像させる。

しかし、片仮名本にみる斯様な批判「邪本ノ惑ヲ破ント欲ス」はいかがであろう。江本裕氏は「殊ニ此物語ハ、元亨釈書・砂石集ニ乗所ヨリモ証拠正シテ、初心ノ人ノ為ニ大幸アリト云ドモ、只今現在スル人ノ仮名有レ之以故、門人堅秘シテ世ニ不レ出也」という事情から、「平仮名本が

批判されるのも仕方ないところだった。平仮名本前半三巻に収まる咄の殆どが片仮名本の咄と共通するのに対し、後半三巻には合致する咄が一篇もないのだから」と述べている。[3] 確かに江本稿の指摘の通りである。

すでに、片仮名本『因果物語』の咄が、平仮名本の原拠であり、そしてその作者が浅井了意であろうことが報告されている。稿者も同感である。ところが、鈴木正三と浅井了意の関係については、曖昧模糊としたまま判然とせず、前述したような出版の経緯がある。朝倉治彦氏は『仮名草子集成』収録平仮名本（十一行本）『因果物語』解題（「備考」七）において、「刊行の経緯、片仮名本との比較、正三と了意との関係など、問題点は多く提出されているが、未だ全てを解決するまでには、私の考えはまとまっていない。」と、その問題点の多さ、両書の関係の複雑さをのべている。[4]

さて、そこで片仮名本『因果物語』を改めて考えてみたいと思う。江本稿[5]はその内容から、片仮名本へのアプローチを試みるが、本稿では書誌的な視点から問題を提起する。今回、管見の中に、片仮名本『因果物語』の跋文のある本を見いだした。本稿では、跋文を紹介するとともに、いくつかの問題点と仮説を述べてみたいと思う。

片仮名本『因果物語』諸本

片仮名本『因果物語』は、『補訂版国書総目録』・『古典籍総合目録』によれば、次の諸本が確認できる。

【版】〈寛文元版〉内閣、東洋岩崎（一冊）、京大潁原（一冊）、東大（一冊）、竜谷（一冊）、石川李花（一冊）、岩瀬（三冊本二部）、草間、朝倉治彦、吉田幸一、［補遺］大谷、香川大神原、駒沢、〈刊年不明〉金沢市（三冊）、東寺（一冊）【複】〔活〕袖珍名著文庫〔複〕古典文庫

このうち、古典文庫に「内閣文庫蔵本」影印[6]、『仮名草子集成』に「金沢市立図書館蔵本」翻刻[7]が紹介されている。

さて、片仮名本は次の三系統の諸本がある。ここで「古典文庫」185〈解題〉（吉田幸一氏）に提示されている諸版を、抜粋してまとめてみると、

①山本平左衛門板　三冊（内閣文庫蔵）

中巻末に「寛文元辛丑季　臘月上旬日助縁開刊」の刊記があり、さらにまた、下巻末に「山本平左衛門」と入木がある。

古典文庫185の「解題」では「板行者、山本平左衛門は秋田屋の屋号で、京都寺町通蛸薬師下ルの書肆である。慶安

頃から下っては天明頃まで続いた書肆である。鈴木正三の著作では、他には「麓草分」の寛文刊本が山本板（初版の明暦二年刊本は堤板か）だから、「因果物語」の山本板三冊本が初版であらう。」とあって、この山本平左衛門板を初版とする。

現存のほとんどがこの版である。

②丁字屋九郎右衛門板　合一冊（吉田幸一氏蔵）

内題、本文、丁数、中巻末刊記等は山本板に同じ。

刊記は、裏表紙の見返しに、「真宗書房　京東六条下数珠屋町　丁子屋九郎右衛門」とある。

古典文学185「解題」では、「本書の板行は恐らく宝暦以後、あるひは更にくだるであらう。」と出版年代を想定する。

他、この系統に東京大学国文学研究室蔵本・草間文庫蔵本・五季文庫蔵本などがある。

③無刊記本　三冊

この無刊記本について、古典文庫185の「解題」では、「中巻末の寛文元年の刊記はあるが、下巻末に無刊記の三冊本がある由である。（朝倉治彦氏の御教示によれば、金沢県立図書館、坂巻氏蔵本等）本書が果して初版本であるかどうか、筆者（※吉田氏）未見につき後考を俟つ。」とある。

＊

これらの片仮名本には、中巻の本文に続いて「助縁」による「寛文元年十二月」の開版であることが記されている。下巻末でないことの意味は不明であるが、朝倉稿の言うとおり（『仮名草子集成』解題）、右の①は求版であろう。入木による書肆名もさることながら、「本書が篤志家の寄附寄進による板彫・料紙調達など無償行為である故、板木は寺の保管にあるが、印行は寺院のみの許可でなく、公許的に可能であった筈である。従って、刊記のないのが初板でなければならない。板元名のある本が存在することは、板木が民間書肆に、のち譲渡された結果であること疑いない」[8]と述べているとおり、「助縁」での出版ならば、刊記、書肆名のない初版があるはずである。

さて、ここで、④として（あるいは初版の可能性として）、右の三系統以外に、京都大学文学研究科図書館潁原文庫・石川県立図書館李花亭文庫蔵本を提示したい。この二書は、①「山本板」にある下巻の入木がなく、代わりに「跋文」が一丁ほど、記されている。③の「無刊記本」に分類されるのであろうか。しかし、片仮名本は、すでに『古典文庫』『仮名草子集成』に公開され解説が述べられているが、どちらにも跋文については記されていない。

まずは、京都大学文学研究科図書館潁原文庫蔵本の書誌

を記す。

書　型　大本三巻一冊。

表　紙　香色布目型押し文様。縦二十四・八糎×横十七・二糎。

題　簽　後補改装子持ち枠左肩「因果物語」（墨筆）。縦十五・九糎×横二・三糎。

序　題　無し。

目録題　「因果物語上（中・下）之目録」。

巻首題　「因果物語上（中・下）」。

尾　題　無し。文末に「終」とある。

版　心　柱題はなく、上下の黒魚尾の間に「上」「中」「下」、および丁付がある。

序　文　「寛文辛丑仲秋日／豊陽久住山下ニ庵ス雲歩和南題」。

構　成　上巻　二十八丁（序二丁「一」「二」、目録一丁「一」、本文二十五丁「一」「二」「三」…「二十六」）。
中巻　二十七丁（目録二丁「一」「二」、本文二十五丁「三」「四」…「二十七」）。
下巻　二十六丁（目録一丁「一」、本文二十四丁「一」「二」「三」…「二十五」、跋文一丁「廿六」）。

本文匡郭　四周単辺。無界。縦二十・八糎×横十五・七糎。

用字序　一面七行　漢字交じり片仮名　ルビ付。
本文　一面十二行　漢字交じり片仮名　ルビ付。
跋文　一面九行　漢字交じり片仮名　ルビ付。

挿　絵　無し。

刊　記　中巻末に「寛文元辛丑季／臘月上旬日助縁開刊」（中巻二十七丁〈裏〉）とある。

最大の特徴は、下巻に「山本平左衛門」の刊記がなく【図版A】、代わりに「跋文」一丁が付加されている点である。また、後述する中巻二十七丁の匡郭も手がかりとなろう。この跋文は、「助縁」及び「刊記」について、考える材料となるのではないか。

石川県立図書館李花亭文庫蔵本も、穎原文庫と同じく、「山本平左衛門」の刊記がなく同様の跋文が付されている【図版B】。しかし、こちらは序文を欠く。

続いて、下巻にある「跋文」一丁分を以下に記す。私に適宜句読点を補い、特殊な文字は通行の字体に改めた。また、巻末に【図版C】を掲載した。ご参照願いたい。

師平日人来。右ノ如ノ事ヲ語ヲ聞毎ニ嘆シテ曰、カホド大事ナルコトヲ知ズ。人毎ニ死ハナニモ無ヤウニ思ヒ後世ヲ恐ル人ナク悪ヲ慎ム者ナシ。扨々、笑止千万也。亦曰、如是ノ物語ヲ聞テモ恐ル心ナキハ業障ノ深故也ト云云。誠ニ此書ヲ余所ニ見ハ愚ナル心ナリ。皆是人々一念上ノ事也。念力ノ作所、右種々

ノ事ヲ見テ自己ヲ慚愧スベシ。経曰、仮使百千劫ニモ所レ作ノ業不レ亡。因縁会遇ノ時、果報還テ自受ト説玉、此文ヲ信シテ少悪ヲモ成ベカラズ。況ヤ亦一念纔ニ生スレバ、生死ニ輪廻シテ永劫浮コト無、誰ガ是ヲ悲サランヤ。此外何コトカ大事アランヤ。如レ是見得シテ心頭ニ眼ヲ著バ此書ノ本意ナリ。若又自己ヲ忘レテ他ノ事トナサバ、仏祖モ亦救コト不レ得。甚可レ懼。開板助縁　報慈比丘書

これは、何を意味するのか。文中の「如レ是見得シテ心頭ニ眼ヲ著バ此書ノ本意ナリ。若又自己ヲ忘レテ他ノ事トナサバ、仏祖モ亦救コト不レ得」というのが本書の目的であったのかもしれない。片仮名本序文にも、斯様な教化の思想があった。

正三老人、因果歴然ノ理、面事ドモ記認テ以テ諸人発心ノ便ト為ント誓。師昔日人来、左ノ如ノ事ヲ語毎、箇様ノ事ヲ聞捨ニスルハ無道心ノ至也。末世ノ者如レ是ノ事ヲ以テ不レ救シテ、何ヲ以カ救ンヤト云テ、是ヲ集ム

現在調査ままならず、跋文に記される「報慈比丘」が何者であるのか、判然としない。中巻に列挙する助縁者の一人かもしれない。すると、この「跋文」と併せて中巻の「助縁開刊」の意味を考えてみてもよいのではないか。

助縁について

この跋文をどう解釈すればよいのか。先に記した序文の激烈な文章よりは穏やかな言いようである。そんな疑問を抱きつつ、改めて中巻の「助縁」を見直してみる。これは正三周辺の説話提供者を想起させる。中巻本文末（二十七丁〈表〉～〈裏〉およそ一丁分）には次のように記されている。

助縁

武州江戸　緇素若干人
江州沢山　僧俗若干人
尾州　緇素若干人
賀州　道俗若干人
越前　僧俗若干人
肥前　緇素若干人
肥後　僧俗若干人
城州京　緇素若干人

寛文元辛丑季

臘月上旬日助縁開刊

」二十七丁〈表〉

右は正三周辺の説話提供者を思わせるリストのようであり、正三の法話に親しんだ地方の存在をうかがい知る。

「江戸」「尾州」は正三にとっての本拠地でもあり、また「肥前」「肥後」は、正三が徳川家康麾下の三河武士として参戦した島原の乱（寛永十四年）をきっかけとする天草訪問と関連する。[9]

ところで、片仮名本『因果物語』は、右のとおり、中巻に助縁者若干人の刊記がある。なぜ、中巻に刊記があるのか、問題提起されつつも不明のままである。

江本裕氏は「この「助縁」には、これぞ正三の遺した『因果物語』であるという、正統性の主張がこめられていたとも考えられる。少なくも読者は、正三を支える基盤の広さを感得したであろう」[10]と、その理由を述べており、稿者も同意見である。

ここで後掲の【図版1】をご覧いただきたい。古典文庫の影印本（一一一頁）では、分かりづらいのだが、先の②の系統に属する五季文庫蔵本【図版2】中巻二十七丁〈表〉「助縁」部分の匡郭をみると、あきらかに上下に切れ目が確認できる。この匡郭の切れ目は、京都大学文学研究科図書館潁原文庫蔵本【図版3】・石川県立図書館李花亭文庫蔵本【図版4】にも同様のそれが確認できる。この「助縁」以下は入木ではなかろうかと、やや大胆な仮説を思う。この「助縁」の部分は、急遽付加されたものではないかと推定する。理由はもちろん先の江本稿の通りだが、仮に下巻に跋文があったとすれば、都合上、中巻に挿入したということも十分に考えられるであろう。とすれば、刊記「寛文元年」、序文による「寛文元年」という年代も、再考する必要があるのではないか。

さいごに

以上、片仮名本『因果物語』の跋文を提示し、また書誌的な視点から、片仮名本『因果物語』について、問題を提起した。

片仮名本は、当初跋文を有していたのではないかと推測する。初版といわれる①「山本板」の刊記が入木であることもその証左となろう。すくなくも、入木のない④潁原文庫蔵本・李花亭文庫蔵本が存在するのであるから、それ以降、山本平左衛門に求版されたと考えてよいのではないか。その際、跋文が削除されたのかもしれない。

跋文者の存在など、まだ考える点は多いのだが、ご教示・ご批正賜れば、幸いである。

注1　石田元季氏「鈴木正三」（藤井乙男氏『江戸文学研究』内外出版、大正10年に所収）。

2　吉田幸一氏「古典文庫」185収録〈片仮名本〉解説（昭

和37年12月）・同『因果物語』の正本と邪本」（「文芸論藻」23号、昭和37年10月）。

3　江本裕氏「因果物語における鈴木正三」（『近世前期小説の研究』近世文学研究叢書12、若草書房、平成12年6月。初出「『因果物語』をめぐる諸問題―片仮名本検討を通して―」（「大妻国文」11号、昭和53年3月）。

4　朝倉治彦氏『因果物語』〈片仮名本〉解説（『仮名草子集成』第四巻、東京堂出版、昭和58年11月）。

5　注3前掲書。

6　注2前掲書。「古典文庫」185。

7　注4前掲書。

8　注4前掲書。「備考」三。

9　正三は反吉支丹側から仏教を擁護すべく『破吉利支丹』（寛文二年）を編述、また六十四歳を過ぎて島原の乱後に天草に赴き、三十二の寺院などを建立した。

10　注3前掲書。

付記

資料の閲覧をご許可いただきました各研究機関に感謝申し上げます。

また、資料をお貸しくださいました渡辺守邦先生に心よりお礼申し上げます。渡辺守邦先生には、大学院博士課程からご指導を賜りました。博覧強記な先生からみれば、私の愚行に苦虫を潰すような思いだったことと存じます。学問のみならず、研究するという責任、また社会人の嗜み、女性としての立ち振る舞いまで、多くのことをご教示いただきました。ここに記して、ご学恩に深甚の謝意を申し上げます。

（つちや　じゅんこ・大妻女子大学非常勤講師）